

彦根市埋蔵文化財調査報告書 第34集

# 天田遺跡Ⅱ

—河瀬土地改良区ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書—

平成16年（2004年）3月

彦根市教育委員会

## 序

本報告書は、団体営ほ場整備事業に伴い発掘調査を実施しました天田遺跡の調査報告書です。  
天田遺跡は、河瀬地区中部の団体営ほ場整備事業に伴い2ヵ年にわたり発掘調査を実施しました。

昨年度の発掘調査では、古墳時代の遺構面が奈良時代以降に整地された場所であることを確認しました。本年度の発掘調査地域は、昨年度に発掘調査を実施しました地域の西側に位置しています。現地は、耕作土の下に湧水がある低湿地に近い状態のところであったことが確認できました。遺構としては、溝や若干のピットと土壤を検出し、出土量は少ないながらも弥生時代から古墳時代後期にかけての土器等が出土しております。

遺跡は、私達の先人の生活や文化といった歴史を現代の私達に教えてくれる資料です。また、遺跡の周辺に見られる開墾されなかった藪や溜池等の地形は、地域の成り立ちを偲ばすものであり、遺跡の存在とあいまって地域の歴史を物語るものと考えられます。

このような意味で、この調査報告書が歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、本調査にご理解とご協力をいただきました河瀬土地改良区の皆様をはじめ、関係者各位に厚くお礼を申し上げます。

平成16年3月

彦根市教育委員会

教育長 矢 田 徹

## 例　　言

1. 本書は、彦根市極楽寺町に所在する天田遺跡の第2次発掘調査報告書である。
2. 天田遺跡の発掘調査は、河瀬土地改良区が実施する団体営ほ場整備事業に伴い、国庫および県費補助を受け発掘調査を実施した。
3. 発掘調査地は、彦根市極楽寺町地先である。
4. 発掘調査は、平成15年9月13日から10月14日までの期間を要し、その後資料整理を実施し平成16年3月31日に全ての事業を終了した。
5. 本調査の事務局は次のとおりである。

彦根市教育委員会事務局文化財課

課　　長	花木　勉	課　長　補　佐	三浦　頴
副　主　幹	尾崎　洋	副　主　幹	矢田　修二
文化財係長	本田　修平	主　　査	川村　太志

なお、発掘調査および本書の執筆、編集は本田修平が担当した。

6. 本調査の従事者は次のとおりである。

調査作業員

及川　一貴、　小西　義和、　高田　重幸、　畠　健次、　山田　年彦　(敬称略)

7. 本調査で出土した遺物等の資料は、本市教育委員会で保管している。

8. 本書で使用している図版の北は、磁北である。

9. 本書で使用している高さは、東京湾の平均水面を基準としている。

## 本文目次

1. 位置と環境 .....	1
2. 発掘調査の方法 .....	2
3. 調査結果 .....	2
4. まとめ .....	4

## 図版目次

第1図 遺跡位置図 .....	6
第2図 平成14・15年度河瀬中部地区は場整備現況図 .....	7
第3図 トレンチ設定図 .....	8
第4図 11トレンチ遺構図・第5図 出土遺物状況図 .....	9
第6図 12トレンチ遺構図 .....	10
第7図 21トレンチ遺構図・第8図 出土遺物状況図 .....	11
第9図 出土遺物実測図 .....	12
第10図 出土遺物状況図 .....	13

## 写真図版目次

11トレンチ溝の検出状況・11トレンチ溝の掘り込み状況 .....	14
11トレンチ溝内の遺物検出状況・11トレンチ溝内の遺物検出状況 .....	15
12トレンチ遺構検出状況・12トレンチ遺構検出状況 .....	16
12トレンチ遺構掘り込み状況・12トレンチ遺構掘り込み状況 .....	17
21トレンチ遺構検出状況・21トレンチ遺物検出状況 .....	18
21トレンチ遺構確認状況・21トレンチ遺構掘り込み状況 .....	19
出土遺物写真 .....	20

## 1. 位置と環境

天田遺跡は、犬上川左岸の扇状地から沖積地への移行する扇状地の先端部の地形に立地しており、付近には、何らかの理由で田や畑に出来なかった藪地が处处にあり、沖積地とはやや違った田園風景をなしている。

扇状地の先端部は、地形的には扇状地で伏流した地下水が湧き出す地域と伏流したままで水不足になる地域の二つの地域にはっきりと分れるところで、湧水を利用できる所は比較的容易に水田の開発が可能な地域である。ただし、沖積地の水田に比べれば比較的に面積が小さいため、大規模な集落の形成は不可能である。また、地下水の伏流した地域は水不足となり、水田の開発は困難なところである。この地域に多く見られる地下水の吸い上げは、このための施設で、水田の開発に大きな役割を果したものである。

旧中山道からJR琵琶湖線にかけてのこの地域は、以上のような地理的な性格を持つ地域であり、水田の開発が比較的容易な地域を含むため、市内でも早くから開けた地域の一つに上げられる。このため、多量ではないにしろ各時代の遺物が出土している地域であり、縄文時代後期以降の各時代の遺物が見られる。また、この地域は、付近に古墳時代後期の群集墳が立地する丘陵が無いことから、平地に小円墳を形成する地域であり、一般的に後期群集墳が横穴式石室を用いていることに対し、木棺直葬墳の形をとるものと考えられる。

このように、この地域は彦根市内でも遺跡が集中して所在するところで彦根市内の他の地域に比べ、比較的にその特色が分かる地域である。

以上のような立地を示す地域に天田遺跡は所在し、その性格は散布地である。天田遺跡の遺物の散布状況は、河瀬小学校の西側の田や畑地に須恵器等の破片が表採できる地域が広がる。また、その地形は段差のある田が東から西へと向かって広がり、この中に藪地は数ヶ所点在しており、藪地の周辺に遺物の散布が多く見られた。

天田遺跡の発掘調査は、昨年度に引き続き今回で2回目の調査であるが、昨年度の調査結果では、遺物を包含した整地層を検出し、ピットや土壙を確認したものの、集落の本体ではなかった。このため、現状の田面で須恵器等の遺物片が多く散布していることから、遺跡の本体に当たる可能性が高いと考えていたものである。

## 2. 発掘調査の方法

平成15年度のは場整備事業に伴う発掘調査事業は、昨年度発掘調査を行なった地域の西側にあたる場所である。遺跡の範囲は、湿地で一旦途切れることが昨年の調査で確認できたが、今年度の調査範囲でも遺物の散布は見られる。このため、調査は先ず、重機で試掘トレンチを設定し、遺構や包含層が確認できた所についてはトレンチを拡張して遺跡の把握を行なう計画で実施した。

試掘調査のトレンチは、遺跡の範囲と考えられる地域に重機で約 $2\text{m} \times 3\text{m}$ の試掘トレンチを設定して実施し、遺構や遺物の包含層の状態を確認したもので、合計で22ヶ所の試掘トレンチを設定した。

試掘調査の結果、11・12・21トレンチで溝やピット等の遺構を確認したため、トレンチを拡張し発掘調査を実施することとした。

なお、設定したトレンチは、11トレンチが $2.5\text{m} \times 8\text{m}$ 、12トレンチが $8\text{m} \times 10\text{m}$ 、21トレンチが $2.5\text{m} \times 11\text{m}$ で、合計は $127.5\text{m}^2$ であった。

## 3. 調査結果

本調査として設定したトレンチは、前述したように試掘で遺構を確認した11・12・21トレンチを拡張して設定したもので、また、調査予定地北端には21トレンチを設定し、全体で3ヶ所のトレンチ設定となった。

全体の土層の概略を記せば、30cmから40cmの耕作土層があり、その下が第2層として20cmから30cmの灰色粘質土層となるが床土の存在は認められなかった。遺構面は、この下の第3層褐黄色粘土層もしくは青灰色粘土層を検出した。土層は、部分的に微高地を示す黄褐色土層があったが、全体的に見れば土層は低湿地を表すものと考えられる。

### 《11トレンチ》

11トレンチは、調査予定地の南西側に設定した試掘調査時に、青灰色粘土層に黒色粘土が落ち込んだ遺構が確認できたため、トレンチを拡張して遺構の確認を行ない、トレンチを設定したものである。このトレンチは、湧水があるため、先ず水切りを行なう必要があり、トレンチの周囲に水切りのための溝を作り、常時排水をしながらの調査となった。

遺構は、幅約4m、深さ約0.5mを測る「U」字状の溝で、主軸の方向はN-16°-Wであった。主な出土遺物は、古墳時代前期の土師器の高杯や甕等が溝の底付近から出土した。また、木製品も出土しており、鍔の柄と考えられる一方の端部に鍔の受け部と考えられる部分が付けられ

ている木製品（径5cm、長さ60cm、木製品番号2）や用途は不明であるが、丸い棒状の木製品の端部を半円状に成形し、この成形した端部から約2cm下に片側に切り込みを入れた木製品（径4cm、長さ80cm、木製品番号1）が出土している。この他、2cm×1cmの細い角材状に加工した木製品（長さ40cm）等が出土している。

出土した土器は、高坏は身の口縁部の立ち上がりがほとんど無い皿状の坏部に脚柱部が付くものと「ラッパ状」に広がる脚部の2個体（土器番号2・3）で、甕は、「受け口状」の口縁（土器番号4）が出土しており、この他小さな平底の底部が出土している。

これらの遺物の出土状態は、溝底の中央部にかたまたま状態で検出できたもので、高坏が脚端部を除く同一個体が検出でき、その他の土器が周りに散っていた状態であった。このような出土状況から考えれば、土器が流されて溜まった状態ではなく、その場で割れて止まった状態であることが見て取れる。また、木製品は、土器とほぼ同一のレベルで出土している。

以上の遺物の出土状態を見れば、木製品がほとんど風化していないことや土器についても同様に保存状態が良いこと等から考えれば、溝は急速に埋まったと考えられ、溝を埋めていた黒色粘土層は一層であった。

以上のような調査結果から考えれば、この付近はかなり深い湿地であったことが考えられる。

※本文中で示した土器番号および木製品番号は、第9・10図ならびに写真図版「出土遺物写真」で示している土器番号および木製品番号である。

## 《12トレンチ》

12トレンチは、11トレンチの西側に設定したもので、試掘調査の段階でピットと若干の遺物（土師器片）を確認したことから試掘トレンチを拡張して設定したもので、地山は黄灰色粘土層であった。

このトレンチも湧水があるため、四周に水切りのための溝を掘り、當時排水を行ないながらの調査となつた。

ピットは、20cmから30cmのものが主で、12ヶ所検出しているが、この内同規模のピットで距離が同じなものが3ヶ所で直線を作っているが、この他で規則的な並びを示すピットは確認できていない。また、遺構面の精査時および遺構の掘り込み時での土器等遺物の出土は確認できなかつた。

## 《21トレンチ》

今回の調査地域の北西端に設定したトレンチで、この地点はは場整備の予定では排水路が入る予定の所であるため、排水路予定地に5ヶ所の試掘トレンチを設定したが、この並びの北端で設

定した21トレンチの第3層青灰色粘土層で黒色粘土層が入り込んだ土壤状の遺構が検出できた。この黒色粘土層には土器が入っていたため、排水路予定地に沿ってトレンチを拡張したものである。このトレンチでも湧水があり、先ず水切りのための排水溝を入れ、當時水抜きを行いながら調査を実施した。また、土壤状の遺構が検出できた地点では、手掘りで幅50cmほどトレンチを拡張した。

土層は、耕作土が30~40cmで第2層の灰黄色粘質土層となり、第3層が青灰色粘土層となるが、トレンチ南側では、第2層と第3層の間に褐色砂利混じり粘土層がはさまっていた。土壤は幅40cm、深さ40cmで不整形な長方形を成しているが、西侧端については確認できていない。

遺物の出土は、土壤のほぼ中央部で同一個体の弥生時代後期の壺がその場で割れたような状態で出土している。ただし、この土器は土壤の底に着いた状態ではなく、浮いた状態で土器片が溜まっていた。土器は、口縁部を刻み、頸部下を刺突紋と櫛状の工具で平行沈線・列点紋を入れた壺（土器番号1）であった。

ただし、この土器の溜まりの中には、1点だけではあるが須恵器の坏身部分の破片が入っていた。また、遺構面と考えている青灰色粘土層の中にも、極少量ではあるが須恵器片や鏡等の柄と考えられる棒状の木製品（木製品番号3・4）が入っており、この層の堆積が最終的には古墳時代後期であったことが確認できた。

以上のことから、この付近は弥生時代後期から古墳時代後期にかけて形成された低湿地であると考えられる。

※ 本文中に示した土器番号および木製品番号は、第9・10図ならびに写真図版「出土遺物写真」で示している土器番号および木製品番号である。

#### 4. まとめ

天田遺跡の発掘調査は、平成14年度に引き続き平成15年度も実施したもので、遺跡の範囲のは場整備予定地のほぼ全体にわたって、現況の田面で須恵器等の遺物が表採できる散布地であった。また、平成14年度の調査結果では、天田遺跡は、その出土遺物より若干の古墳時代前期の遺物を出土することから、遺跡の始まりは古墳時代前期まで上がるものと判断できた。しかし、遺跡の中心的な時代は、古墳時代後期から奈良時代にかけてのものであると考えられる。ただし、奈良時代から平安時代までのある時期に遺構面が削平を受け整地されたことにより、前年度の発掘調査で検出した遺構の状態が作られた。このため、前回検出した遺構の状態からは、ピットや土壤と考えられる落ち込みの存在から遺跡の性格が集落跡であったものと考えられるが、遺構面が整地されていることから落ち込みの線が不明瞭であり、落ち込みの性格を把握するまで至らなかつたことや柱が規則的に並ぶ等の明確な遺構の検出等はできなかつたことにより、その確証

は得られていない。

平成15年度の発掘調査では、遺跡の西北端で確認した土壌状の落ち込みで弥生時代後期の壺が1個体出土しているが、古墳時代後期の須恵器が同時に出土しており、また、この遺構の地山と考えていた青灰色粘土層にも少量はあるが、古墳時代後期の須恵器が出土している。この土層の状態から考えれば、この地域は低湿地であり一時期激しい堆積が見られるにしろ全体的にはゆっくりとした堆積を示している状態の土層であったことが判る。この地点で出土した弥生時代後期の土器は、摩滅もほとんど見られない確りしたものであることから、遠くから流されてきたものではなく、この付近に遺跡の本体があったことが考えられる。

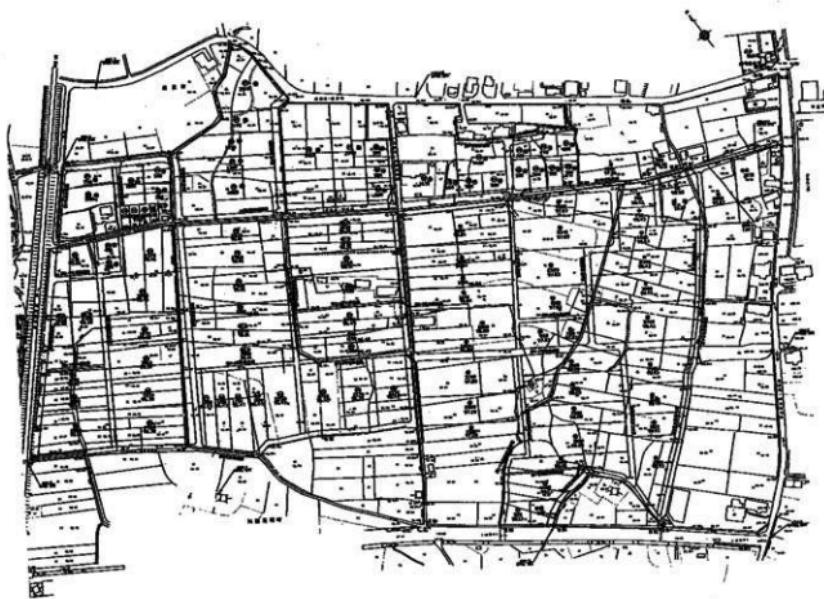
また、調査区域の南端に設定した11トレンチでは、検出した溝内から古墳時代前期の土器が出土しており、同時に出土した木製品についても同時期のものと考えられ、付近にこの時代の集落があったことが考えられる。また、この西側の12トレンチで確認したピットが所在する微高地は、ピットの並びに規則性が見られないことから、建物跡に残されたピットとは考えられないことから、遺跡の本体が所在した微高地とは考えられない。

以上のことから、今回確認した遺構および遺物の出土は、遺跡周辺部に所在した低湿地に残された遺構を確認したものと考えられる。

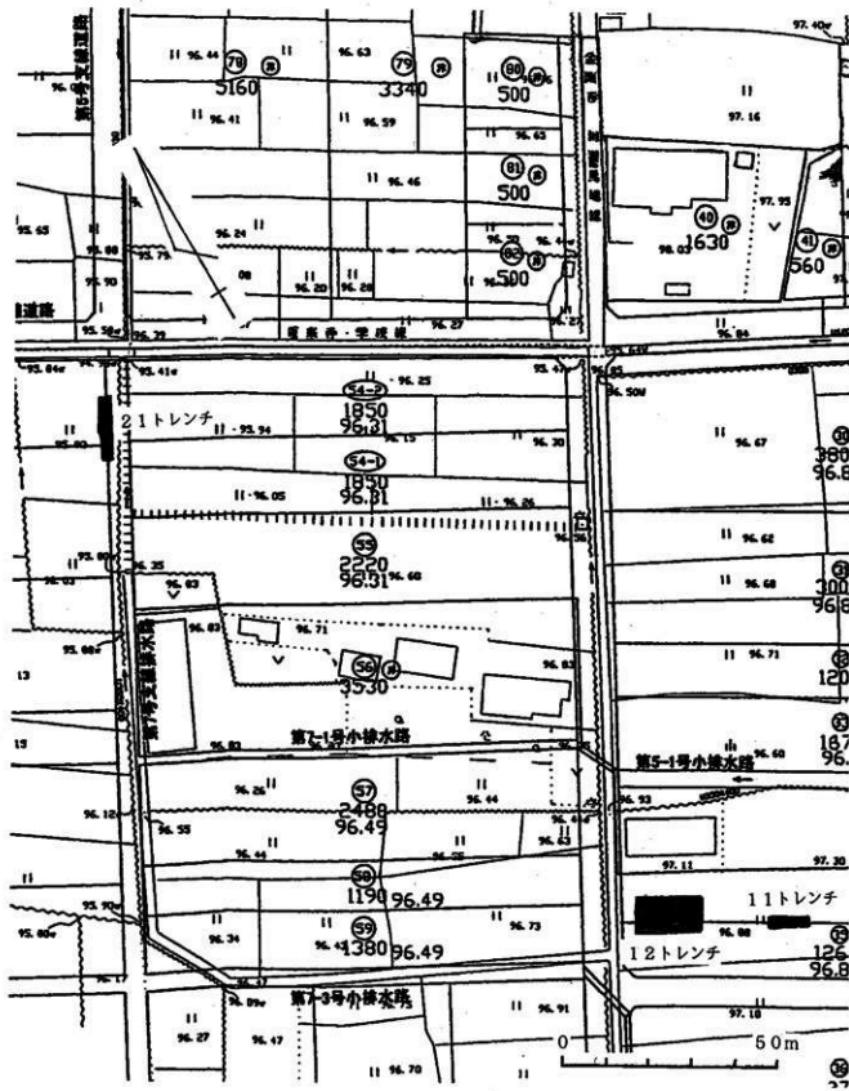


1	天田遺跡	2	丁田遺跡（古墳時代～中世・散布地）
3	門田遺跡（古墳時代～奈良時代・散布地）	4	堀城遺跡（中世・城館跡）
5	蓮台寺遺跡（中世・城館跡）	6	蓮台寺城遺跡（中世・城館跡）
7	寺村遺跡（古墳時代～平安時代・散布地）	8	横地遺跡（弥生時代～奈良時代・集落跡）
9	石原遺跡（古墳時代～平安時代・散布地）	10	堀南遺跡（弥生時代～奈良時代・集落跡）
11	神ノ木遺跡（绳文時代～平安時代・集落跡）	12	辻ノ東遺跡（古墳時代～奈良時代・散布地）
13	段ノ東遺跡（古墳時代～平安時代・散布地）	14	葛籠北遺跡（古墳時代～奈良時代・集落跡）
15	極楽寺遺跡（古墳時代～奈良時代・集落跡）	16	西海道遺跡（古墳時代～平安時代・散布地）
17	杉田遺跡（古墳時代～平安時代・散布地）	18	鶴ヶ池遺跡（古墳時代～平安時代・散布地）
19	馬場遺跡（弥生時代・集落跡）	20	法士南遺跡（古墳時代～中世・散布地）

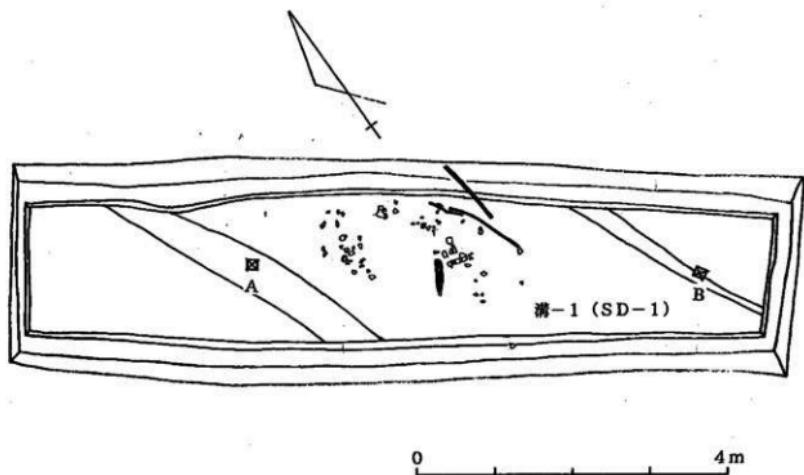
第1図 遺跡位置図



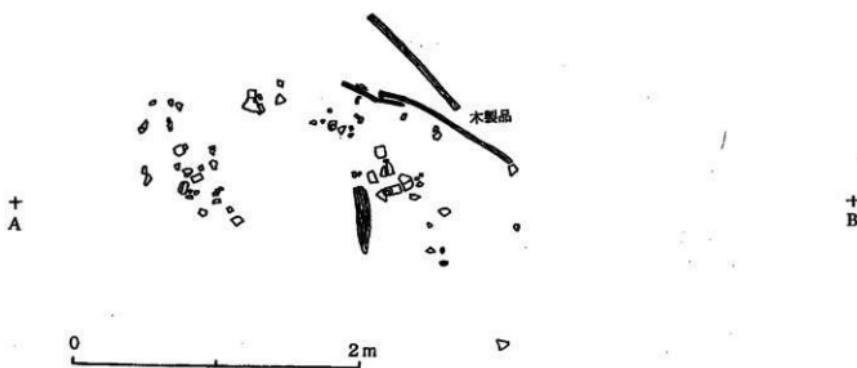
第2図 平成14・15年度 河瀬中部地区ほ場整備現況図



第3図 トレンチ設定図

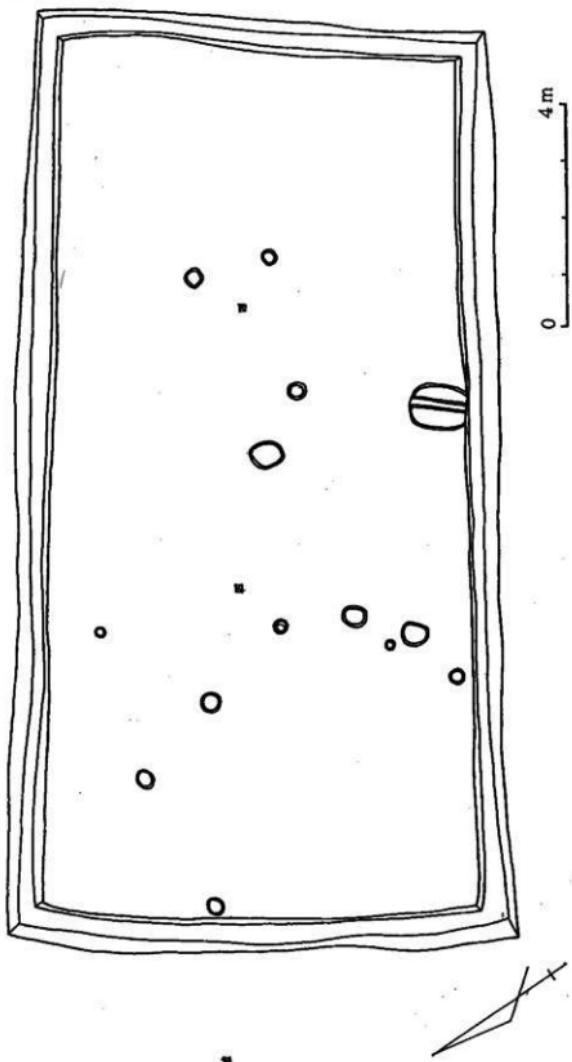


第4図 11トレンチ遺構図

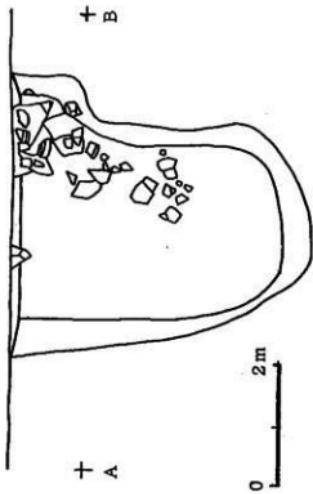


第5図 出土遺物状況図

第6図 12トレンチ遺構図

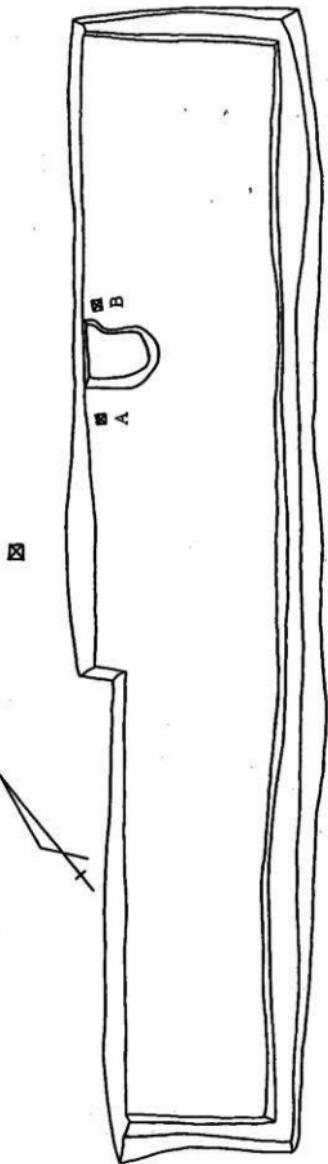


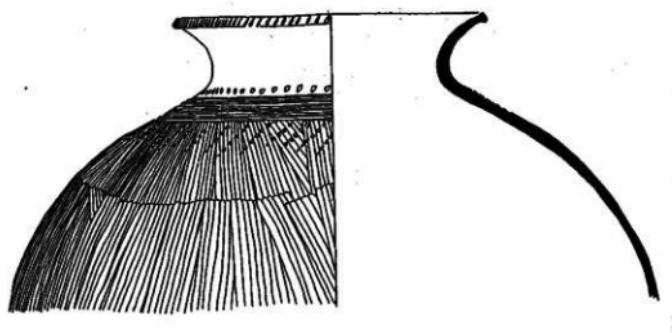
第8図 出土遺物状況図



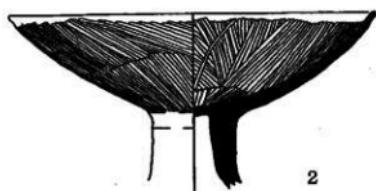
0 4m

第7図 21トレンチ構造図

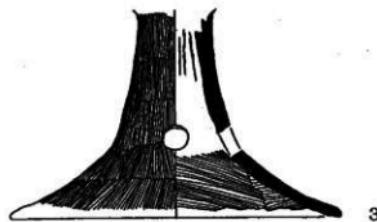




1



2



3



4

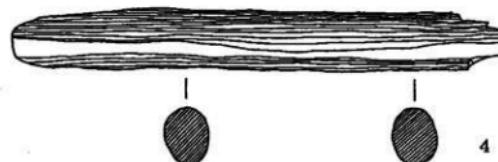
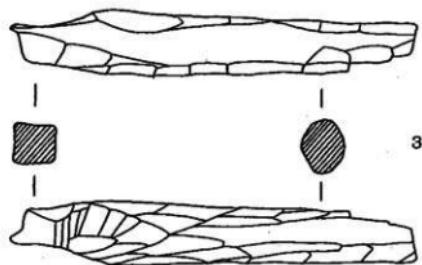
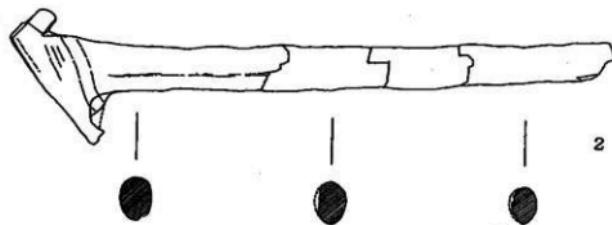
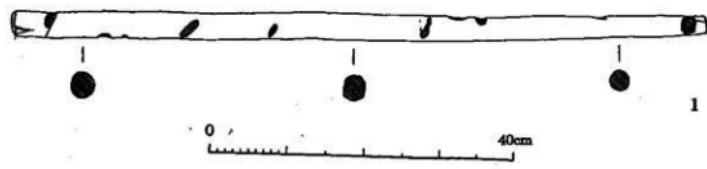
0 10cm



5

(1・5は21トレンチ、2・3・4は11トレンチ出土)

第9図 出土遺物実測図



0 20cm

(1・2は11トレンチ、3・4は21トレンチ出土)

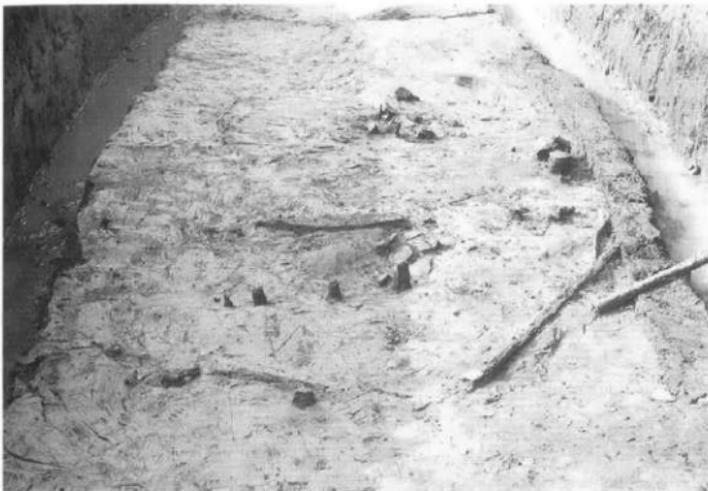
第10図 出土遺物状況図



11 トレンチ溝（SD-1）の検出状況（西側から）



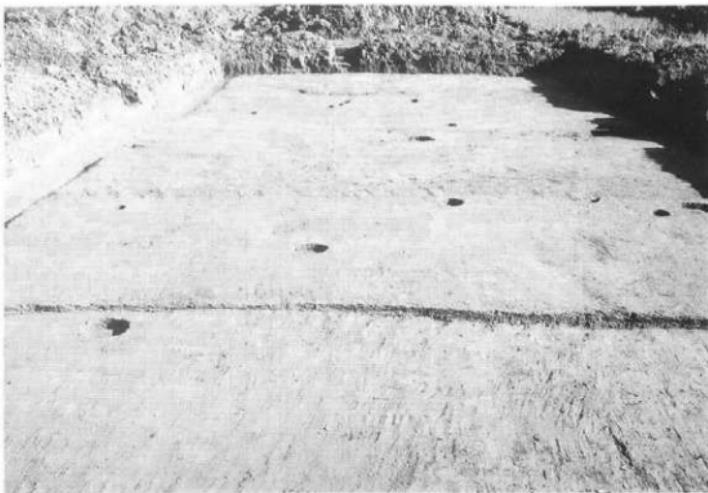
11 トレンチ溝（SD-1）の掘り込み状況（東側から）



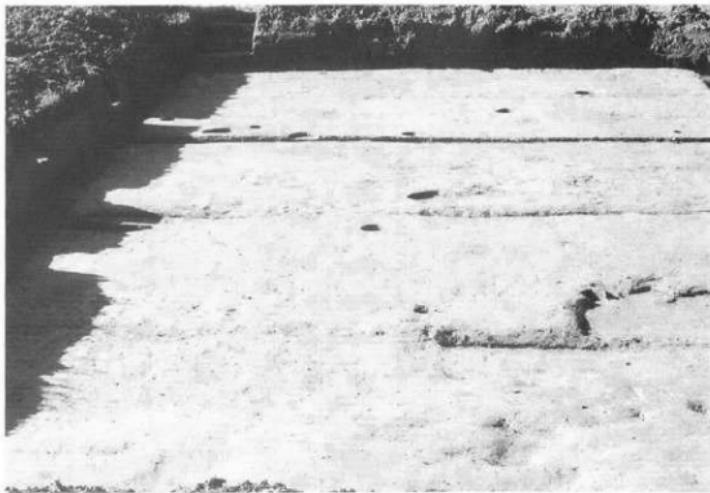
11 トレンチ溝（SD-1）内の遺物検出状況（東側から）



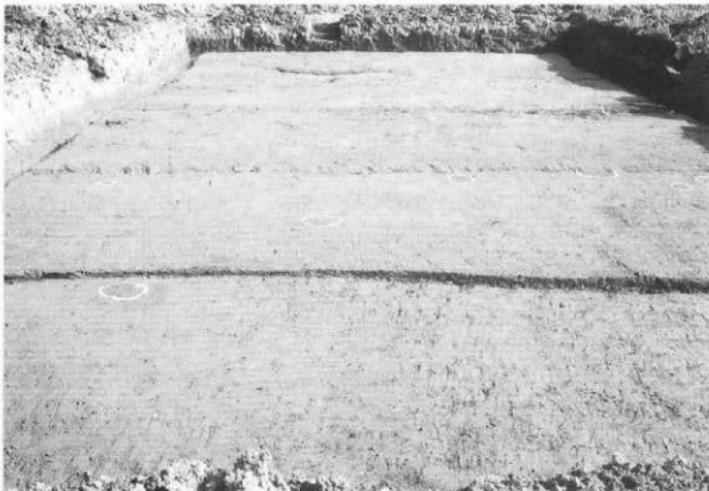
11 トレンチ溝（SD-1）内の遺物検出状況（北側から）



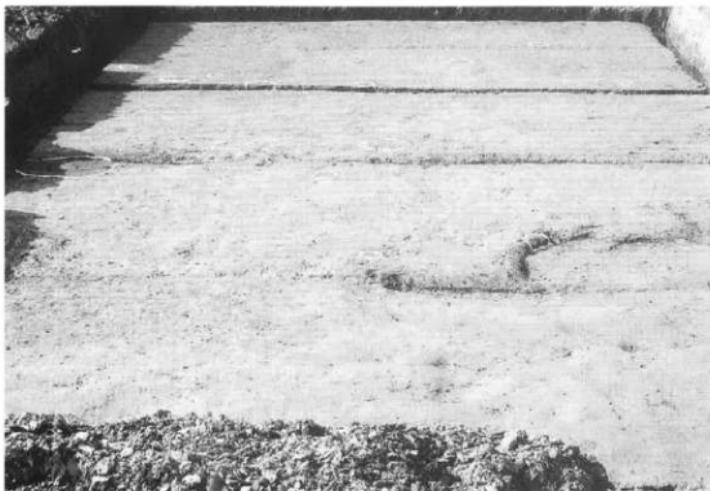
12 トレンチ遺構検出状況（西側から）



12 トレンチ遺構検出状況（東側から）



12 トレンチ遺構掘り込み状況（西側から）



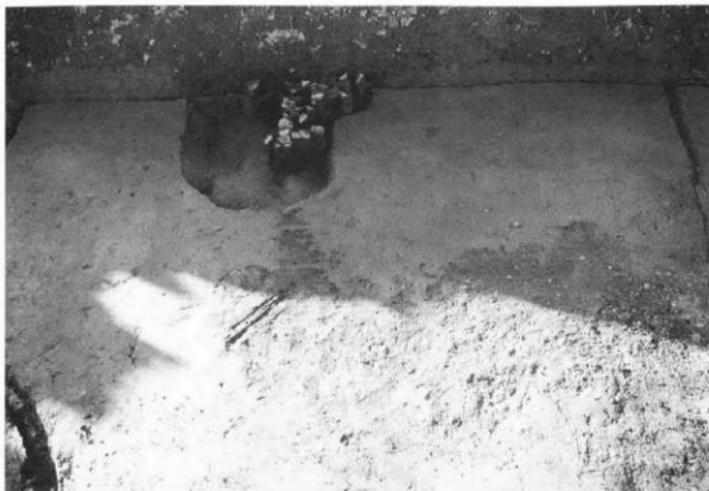
12 トレンチ遺構掘り込み状況（東側から）



21 トレンチ遺溝検出状況



21 トレンチ遺物検出状況



21 トレンチ遺構確認状況



21 トレンチ遺構掘り込み状況



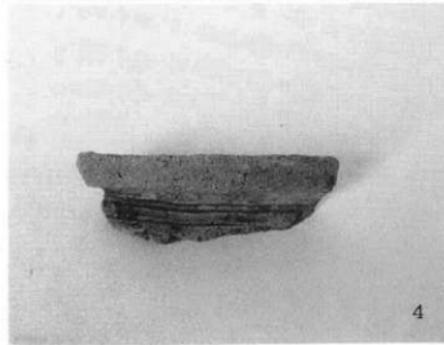
1



2



3

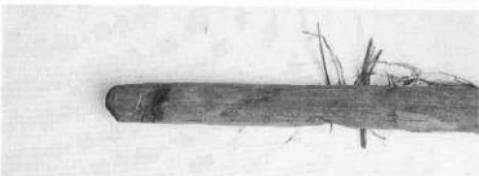


4



5

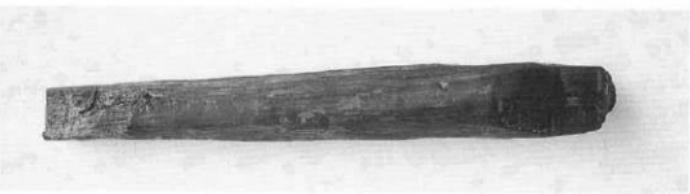
出土遺物写真



2



3



4

出土遺物写真

